

## 南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造

五十嵐 陽 介

一橋大学

**【要旨】** 琉球語南琉球語群宮古語の方言である池間方言と多良間方言は3種類のアクセント型が対立するいわゆる三型アクセント体系を有する。両方言のアクセント型の区別は広範な環境で中和する。また両方言は、日本語諸方言と比較して複雑なアクセント型の実現規則を有する。本稿は、両方言の韻律構造を記述するためには、2モーラ以上の語根および接語が写像される韻律範疇である韻律語を仮定しなければならないことを示す。また本稿は、韻律範疇を扱う理論的研究の知見を踏まえながら、問題の韻律範疇に韻律語の地位を与えることの妥当性に関する予備的な議論を行う\*。

**キーワード：**アクセント、韻律範疇、韻律語、フット、琉球語

### 1. はじめに

琉球諸語は日本語との系統関係が証明されている唯一の言語群であり（服部1979a）、5つの下位言語、すなわち奄美語、沖縄語（以上、北琉球語群）、宮古語、八重山語、与那国語（以上、南琉球語群）から構成される（Pellard 2015）。本稿が分析対象とする池間方言と多良間方言はいずれも宮古語の下位方言である。池間方言は沖縄県宮古島の3つの集落（池間島、伊良部島佐良浜集落、宮古島西原集落）で、多良間方言は沖縄県宮古郡多良間村（多良間島、水納島）で話されている（Hayashi 2010; 下地 2006）<sup>1</sup>。両方言ともに、語の長さが増えても対立数が増加しない「N型アクセント」体系（上野 1984, 2012）を有する。N型アクセントのうち、対立するアクセント型の数が2のものは「二型アクセント」、3のものは「三型アクセント」と呼ばれるが（上野 1984, 2012）、池間方言と多良間方言は、三型アクセント体系を有する。

松森晶子氏によって多良間方言が（松森 2010）、筆者らによって池間方言が

\* 本稿には、田窪行則氏、林由華氏、久保智之氏とともに収集した池間方言のデータ、および松森晶子氏とともに収集した多良間方言のデータを使用させていただきました。お礼申し上げます。また松浦年男氏と下地理則氏には草稿の段階でコメントをいただきました。ありがとうございました。また有益なコメントをいただきました2名の査読者に感謝申し上げます。本稿は、科学研究費補助金基盤研究（A）（研究課題番号 26244022）および若手研究（B）（研究課題番号 23720207）の助成、および国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」の助成を受けて行った研究成果の一部です。記して謝意を表します。

<sup>1</sup> 本稿における池間方言のデータは宮古島西原集落にて収録したものであり、多良間方言のデータは多良間島塩川集落、仲筋集落にて収録したものである。多良間方言の調査項目（特に複合語）は、主として松森晶子氏が作成したものである。

(Igarashi et al. 2011) 三型アクセント体系を有することが最近明らかにされるまで、およそ半世紀の間、両方言のアクセント体系は二型であると誤って記述されてきた(平山 1964, 1983; 平山他 1967; 崎村 2006; Hayashi et al. 2008)。宮古語諸方言のアクセント体系の記述が、アクセント型の対立数という基本的な事項に関してさえ妥当性を欠いてきた主要な原因は、宮古語諸方言がおそらく共有する独特の韻律構造にある。宮古語諸方言のアクセント型の区別は、広範な環境で、その一部あるいはすべてが中和する(松森 2013, 2014, 2015; 五十嵐他 2012; 青井 2012; 五十嵐 2015)。宮古語諸方言の韻律構造は、日本語諸方言のアクセント体系を記述するための枠組みで広く用いられてきた諸概念、すなわち音節、モーラ、語ないし文節を用いるだけでは記述できない。

本稿の目的は、池間方言と多良間方言におけるアクセント型を記述するためには、2モーラ以上の語根・接語が写像される韻律範疇である「韻律語」を定義しなければならないことを示すことにある。以降、第2節では、これまで広く用いられてきた分析方法では、池間方言と多良間方言における3種類のアクセント型を同定することができないことを指摘したのち、3種類の型の区別を観察するためには発話が十分な数の形態素から構成されることが必要であることを示す。第3節では池間方言と多良間方言に韻律語という韻律範疇を定義し、この韻律範疇を仮定しなければ両方言のアクセント型の実現形が正しく記述できないことを示す。第4節では問題の韻律範疇を韻律語とみなす理論的妥当性を検討する。第5節で結論を述べる。なお本稿では単一の文節内部でアクセント型がどのように実現されるかに焦点を当てることとし、文レベルでの型の実現は検討しない。宮古語諸方言におけるアクセント型の実現規則は、日本語諸方言における規則と比較してはるかに複雑であり、その包括的な記述は本稿の射程を大幅に超える。現時点までに明らかにされている池間方言の実現規則に関しては Igarashi et al. (forthcoming) を、多良間方言の実現規則に関しては五十嵐 (2015) や松森 (2014) を参照されたい。

## 2. 三型アクセント体系

### 2.1. 中和

日本語諸方言の一部、例えば京都方言や鹿児島方言では、単独で発話された語を観察するだけで、当該の方言において対立するすべてのアクセント型を同定することが可能である(上野 1989)。一方、東京方言をはじめとする多くの日本語諸方言では、語の単独発話で型の一部が中和してしまう。東京方言には2モーラ名詞に関して3種類のアクセント型(平板型、尾高型、頭高型)があるが、平板型と尾高型は単独発話において中和する(1)<sup>2</sup>。(以降、アクセント型の実現型を示す際には、モーラ境界をピリオドで、高ピッチを持つモーラを太字で表す。その際の分節音の表示

<sup>2</sup> 東京方言の平板型と尾高型が単独発話において完全に中和するか否かに関しては異論がある(Warner 1997)。

は表層表示とする。また形態統語構造を表す際には、複合語の語根境界を“+”，接語境界を“=”，接辞境界を“-”で表す<sup>3</sup>。その際に分節音の表示は基底表示とシタリック体で示す。形態統語構造とアクセント型の実現型を同時に表す際には、前者を上段に、後者を下段に示す。分節音の“c”は無声歯茎破擦音を表す。

## (1) 東京方言

平板 a.me 「鉛」 尾高 ha.na 「花」 頭高 na.be 「鍋」

しかしながら、語に1モーラ接語(助詞)を後続させることによって(例えば主格=*ga*)、対立するすべての型を同定することが可能となる(2)。

## (2) 東京方言

平板 *ame=ga* 「鉛が<sup>3</sup>」 尾高 *hana=ga* 「花が」 頭高 *nabe=ga* 「鍋が」  
a.me.ŋa ha.na.ŋa na.be.ŋa

多くの方言において、単独発話で中和する型の区別が、接語を後続させることにより実現するため(上野1989)、「名詞・接語」という連続は、日本語諸方言のアクセント体系を記述するための有用なフレームセンテンスとして利用されてきた。しかしながら宮古語諸方言では、たとえこの「名詞・接語フレーム」を用いたとしても、すべてのアクセント型の区別が実現するとは限らない。

(3)は池間方言の2モーラ名詞の実現形である。宮古語には1モーラ名詞が存在しないため、2モーラ名詞は宮古語における最小の名詞となる(Hayashi 2010; Pellard 2009; 下地 2006; Shimoji 2008)。2.2節に示すように、池間方言では3種類のアクセント型(A型、B型、C型<sup>4</sup>)が対立するが、対立するすべての型を観察できる環境は極めて限定されている。池間方言の2モーラ名詞は、単独発話においてだけでなく、1モーラ接語(主格=*nu*)を後続させたとしても、3種類のアクセント型の区別の一部が表層で消失する(五十嵐他2012; Igarashi et al. forthcoming)。具体的にはA型とB型が中和し、C型が他の型と区別される。

<sup>3</sup> 接辞と接語の区別は、池間方言と同様に宮古語の下位方言である伊良部長浜方言の記述(Shimoji 2008)に従う。

<sup>4</sup> それぞれのアクセント型に与えられるラベル(A型、B型、C型)は、松森(2012)の提唱する「系列別語彙」におけるA系列、B系列、C系列の区別に基づいている。系列とは琉球語諸方言におけるアクセント型の対応に基づいて琉球祖語に再建される3種類の型にそれぞれ属する語の集合のことである。日本語諸方言との対応に関して言えば、いわゆる「金田一語類」(金田一1974)の2拍名詞第1類(「烏賊」「酒」「風」等)と第2類(「紙」「音」「人」等)はA系列に対応し、第3類(「花」「山」「豆」等)の大部分、第4類の約半数(「肩」「板」「麦」等)、第5類の約半数(「雨」「汗」「繭」等)はB系列に対応し、第4類の残りの半数(「海」「中」「舟」等)と第5類の残りの半数(「桶」「陰」「鍋」等)はC系列に対応する。ただし池間方言においては、3モーラ以下の名詞に関する限り、A系列がB系列に合流する過程にあるため、A型に属する名詞が極めて少ない。A系列の単純名詞の大多数はB型で実現される(Igarashi et al. 2011; 五十嵐他2012)。

## (3) 池間方言(A型とB型が中和)

- |    |                       |                       |                       |
|----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| a. | A <i>butu</i> 「夫」     | B <i>hana</i> 「花」     | C <i>nabi</i> 「鍋」     |
|    | <b>bu.tu</b>          | <b>ha.na</b>          | <b>na.bi</b>          |
| b. | A <i>butu=nu</i> 「夫が」 | B <i>hana=nu</i> 「花が」 | C <i>nabi=nu</i> 「鍋が」 |
|    | <b>bu.tu.nu</b>       | <b>ha.na.nu</b>       | <b>na.bi.nu</b>       |

多良間方言も同様に、3種類の対立する型(A型, B型, C型)があるが、3種類の型の区別が観察される環境は限定されている。多良間方言の2モーラ名詞は、(4)に示すように、単独発話および1モーラ接語を後続させた発話において、すべての型が中和する(青井 2012; 松森 2014; 五十嵐 2015)。

## (4) 多良間方言(すべての型が中和)

- |    |                       |                       |                       |
|----|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| a. | A <i>butu</i> 「夫」     | B <i>pana</i> 「花」     | C <i>nabi</i> 「鍋」     |
|    | <b>bu.tu</b>          | <b>pa.na</b>          | <b>na.bi</b>          |
| b. | A <i>butu=nu</i> 「夫が」 | B <i>pana=nu</i> 「花が」 | C <i>nabi=nu</i> 「鍋が」 |
|    | <b>bu.tu.nu</b>       | <b>pa.na.nu</b>       | <b>na.bi.nu</b>       |

この事実は、日本語諸方言のアクセント体系を記述するためにこれまで慣習的に広く用いられてきた方法、すなわち「名詞・接語フレーム」の利用が、宮古語諸方言には無効であることを示している。

## 2.2. 3種類のアクセント型の実現

池間方言と多良間方言における3種類の型の区別を観察するためには、発話が十分な数の形態素から構成されていることが必要となる。ここではまず、3種類の型が区別される環境のひとつとして、複数の語根からなる名詞、すなわち複合名詞を含む文節を単独で発話した際の実現形を検討する。

(5)は2モーラ語根3つからなる池間方言の複合名詞である。この環境では3種類の型が区別される(Igarashi et al. forthcoming)。発話の冒頭に高ピッチが現れる点はすべての型に共通しているが、それに加えてB型では3番目の形態素(語根)に高ピッチが現れ、C型では2番目の形態素(語根)に高ピッチが現れる点で、3種類の型が区別される。

## (5) 池間方言

- |   |                        |   |                          |   |                        |
|---|------------------------|---|--------------------------|---|------------------------|
| A | <i>aka+mami+kii</i>    | B | <i>gazi+hana+kii</i>     | C | <i>ju+fau+busi</i>     |
|   | 赤+豆+木                  |   | 鉤+花+木                    |   | 夕食+食い+星                |
|   | 「小豆の木」                 |   | 「ガジュマルの木」                |   | 「一番星」                  |
|   | <b>a.ka.ma.mi.gi.i</b> |   | <b>ga.dzi.ha.na.gi.i</b> |   | <b>ju.i.fa.u.bu.si</b> |

3種類の型は、2~3モーラ語根2つからなる複合名詞に2モーラ接語が後続した環境でも区別される(6)。高ピッチの分布は(5)と同様であり、B型では3番目

の形態素（接語）に高ピッチが現れ、C型では2番目の形態素（語根）に高ピッチが現れる。

(6) 池間方言

|   |                          |   |                          |   |                          |
|---|--------------------------|---|--------------------------|---|--------------------------|
| A | <i>kuusu+hai=mai</i>     | B | <i>cimma+hai=mai</i>     | C | <i>gaura+hai=mai</i>     |
|   | 唐辛子+畑=も                  |   | 葱+畑=も                    |   | 苦瓜+畑=も                   |
|   | 「唐辛子畑も」                  |   | 「葱畑も」                    |   | 「苦瓜畑も」                   |
|   | <b>ku.u.su.ba.i.ma.i</b> |   | <b>ci.m.ma.ba.i.ma.i</b> |   | <b>ga.u.ra.ba.i.ma.i</b> |

多良間方言においても同様に、2モーラ語根3つからなる複合名詞で3種類の型が区別される(7)。すべての型においてピッチ下降が認められるが、その下降は、A型では最後、B型では2番目、C型では1番目の形態素（語根）に現れており、3種類の型は下降の位置によって区別されている。

(7) 多良間方言

|   |                        |   |                         |   |                         |
|---|------------------------|---|-------------------------|---|-------------------------|
| A | <i>zzu+vvi+pitu</i>    | B | <i>mami+vvi+pitu</i>    | C | <i>sata+vvi+pitu</i>    |
|   | 魚+売り+人                 |   | 豆+売り+人                  |   | 砂糖+売り+人                 |
|   | 「魚売りの人」                |   | 「豆売りの人」                 |   | 「砂糖売りの人」                |
|   | <b>z.zu.v.vi.pi.tu</b> |   | <b>ma.mi.v.vi.pi.tu</b> |   | <b>ea.ta.v.vi.pi.tu</b> |

2～3モーラ語根2つからなる複合名詞に2モーラ接語が後続した環境下で3種類の型が区別される点においても(松森2014)、多良間方言と池間方言は共通している(8)。下降の表れる位置は(7)と同様であり、A型では最後の形態素（接語）、B型では2番目（語根）、C型では1番目の形態素（語根）に下降が現れている。

(8) 多良間方言

|   |                           |   |                         |   |                           |
|---|---------------------------|---|-------------------------|---|---------------------------|
| A | <i>kacuu+msu=mai</i>      | B | <i>avva+msu=mai</i>     | C | <i>tarama+msu=mai</i>     |
|   | 鰹+味噌=も                    |   | 油+味噌=も                  |   | 多良間+味噌=も                  |
|   | 「鰹味噌も」                    |   | 「油味噌も」                  |   | 「多良間味噌も」                  |
|   | <b>ka.teu.u.m.eu.ma.i</b> |   | <b>a.v.va.m.eu.ma.i</b> |   | <b>ta.ra.ma.m.eu.ma.i</b> |

ある方言のアクセント型の実現形を例示する際に、単純名詞ではなく複合名詞を最初に例示するのは一般的ではない。本節ではそれを行ったわけであるが、その理由は、単純語の単独発話あるいは接語を1つ伴う単純語の単独発話では、アクセント型が中和することにある(松森2013, 2014, 2015; 五十嵐他2012; 青井2012; 五十嵐2015)。それに対して複合語は、それが語根3つから構成される場合は、単独発話であっても中和が生じず、それが語根2つからなる場合は、2モーラ接語を伴えば中和が生じない。単純語における3種類の型の区別は、例えば単純語に2モーラ接語を2つ後続させたフレーム文や(池間方言 *nabi=kara=mai* 「鍋からも」)、あるいは2モーラ接語を伴う単純語に述語を後続させたフレーム文を用いると(池間方

言 *nabi=mai njaa-n*. 「鍋もない。」や *nabi=mai ar-i-i=du ur*. 「鍋もある。」<sup>5)</sup>、観察することができる。これらのフレーム文は単純語だけでなく複合語にも有効である。池間方言と多良間方言、そしておそらく大部分の宮古語諸方言では、このような独特のフレーム文を用いなければ、当該の方言で対立するアクセント型の数を同定できない。その理由は、次節から論じる独特の韻律構造にある。

### 3. 韻律語

#### 3.1. 語根・接語が写像される韻律範疇

池間方言と多良間方言における3種類の型の実現形は、名詞あるいは文節のモーラ数のみから予測することはできず、また個々の形態素境界のみから予測することもできない。両方言のアクセント型の実現形を記述するためには、形態素のモーラ数と境界を参照する規則によって派生される韻律範疇を定義する必要がある。本稿ではこの韻律範疇を「韻律語」(Prosodic Word)と名付け、“( )”で表すこととする。韻律語は(9)の韻律語形成規則によって派生される(Igarashi et al. forthcoming; 五十嵐 2015)。この規則は池間方言と多良間方言に共通である。

#### (9) 韻律語形成規則(池間方言・多良間方言共通)

「2モーラ以上の語根・接語の左端に韻律語境界を挿入せよ。」

(9)で2モーラ以上の「形態素」ではなく「語根・接語」としているが、これは形態統語構造から韻律構造を写像する規則において、一部の接辞は語根・接語と異なるふるまいを見せることが、すくなくとも池間方言に関して明らかになっているためである。特に動詞接辞は韻律語を形成しない(第4節参照)。

韻律語形成規則(9)によって、形態統語構造の異なる文節の韻律語は(10)のように形成される(例は池間方言)。

#### (10) 韻律語の形成

|                |                |                   |
|----------------|----------------|-------------------|
| a. <i>mami</i> | b. <i>avva</i> | c. <i>maukjaa</i> |
| 豆              | 油              | 前                 |
| (ma.mi)        | (a.v.va)       | (ma.u.kja.a)      |
| (ma.mi)        | (a.v.va)       | (ma.u.kja.a)      |

<sup>5)</sup> 動詞語根の *njaa-*「ない」と *ar-*「ある」はいずれもC型である。しかし、動詞のアクセント型がいかなるものであれ、フレーム文を構成する述語として用いることができる。問題の述語の形態統語構造は、*njaa-n* (ない - 否定「ない」)、*ar-i-i=du ur* (ある - 幹母音 - 中止 = 焦点居る「ある」)である。前者は否定の動詞接辞 *-n* を伴っているが、否定の意味を失っている。同様に、この動詞の過去形は *njaa-ddan* (無い - 否定・過去「なかった」)となり、否定の意味を本来は持つ動詞接辞 *-ddan* を伴うが、ここでは否定の意味を失っている。動詞語根 *njaa-* は、過去の意味のみを持つ動詞接辞 *-tai* を伴うことができない。( *idi-n* (出る - 否定「出ない」)、*idi-tai* (出る - 過去「出た」)、*idi-ddan* (出る - 否定・過去「出なかった」)と比較。)

|  |  |   |
|--|--|---|
| d. <i>mami=nu</i><br>豆=が <sup>s</sup><br>(ma.mi.nu<br>(ma.mi.nu)                       | e. <i>avva=nu</i><br>油=が <sup>s</sup><br>(a.v.va.nu<br>(a.v.va.nu)             | f. <i>maukjaa=nu</i><br>前=が <sup>s</sup><br>(ma.u.kja.a.nu<br>(ma.u.kja.a.nu)               |
| g. <i>cimma+bai</i><br>葱+畑<br>(ci.m.ma(ba.i<br>(ci.m.ma)(ba.i)                         | h. <i>hana=mai</i><br>花=も<br>(ha.na(ma.i<br>(ha.na)(ma.i)                      | i. <i>maukjaa=mai</i><br>前=も<br>(ma.u.kja.a(ma.i<br>(ma.u.kja.a)(ma.i)                      |
| j. <i>cimma+bai=nu</i><br>葱+畑=が <sup>s</sup><br>(ci.m.ma(ba.i.nu<br>(ci.m.ma)(ba.i.nu) | k. <i>hana=mai=du</i><br>花=も=焦点<br>(ha.na(ma.i.du<br>(ha.na)(ma.i.du)          | l. <i>maukjaa=mai=du</i><br>前=も=焦点<br>(ma.u.kja.a(ma.i.du<br>(ma.u.kja.a)(ma.i.du)          |
| m. <i>gazi+hana+kii</i><br>鉤+花+木<br>(ga.dzi(ha.na(gi.i<br>(ga.dzi)(ha.na)(gi.i)        | n. <i>hana=kara=mai</i><br>花=から=も<br>(ha.na(ka.ra(ma.i<br>(ha.na)(ka.ra)(ma.i) | o. <i>maukjaa=kara=mai</i><br>前=から=も<br>(ma.u.kja.a(ka.ra(ma.i<br>(ma.u.kja.a)(ka.ra)(ma.i) |

(10abc) は 2～4 モーラの単純語であるが<sup>s</sup>、そのモーラ数にかかわらず、1つの韻律語に写像される。これらに 1 モーラ接語が付与された文節が (10def) であるが、1 モーラ接語は独立した韻律語を形成できず、先行する韻律語に融合する。したがっていずれも韻律語 1つに写像される。(10g) は 3 モーラ語根と 2 モーラ語根からなる複合語であり、(10h) は 2 モーラ単純語に 2 モーラ接語が後続した文節であり、(10i) は 4 モーラ単純語に 2 モーラ接語が後続した文節である。いずれも 2 モーラ以上の語根・接語 2つから構成されるので、それぞれの語根・接語が韻律語を形成する。結果として、語根、接語の区別にかかわらず 2つの韻律語が形成される。これらに 1 モーラ接語が後続した文節が (10jkl) であるが、1 モーラ接語は先行する韻律語に融合されるので、(10ghi) と同様に 2つの韻律語が形成される。(10m) は 2 モーラ語根 3つからなる複合語であり、(10no) は単純語に 2 モーラ接語が 2つ後続した文節である。いずれの場合も 2 モーラ以上の語根・接語 3つから構成されるので、それぞれの語根・接語が独立の韻律語を形成する。

### 3.2. 池間方言における韻律語

初めに池間方言における韻律語形成と型の実現形を検討しよう。2.2 節で検討した (5,6) の韻律構造は、韻律語形成規則によって、(11) の韻律構造に写像される。

- (11) a. (=5) A *aka+mami+kii* B *gazi+hana+kii* C *jui+fau+busi*  
(a.ka)(ma.mi)(gi.i) (ga.dzi)(ha.na)(gi.i) (ju.i)(fa.u)(bu.si)
- b. (=6) A *kuusu+bai=mai* B *cimma+bai=mai* C *gaura+bai=mai*  
(ku.u.su)(ba.i)(ma.i) (ci.m.ma)(ba.i)(ma.i) (ga.u.ra)(ba.i)(ma.i)

(11a) と (11b) は異なる形態統語構造を有するが、韻律語形成規則によって、同一の韻律構造すなわち3つの韻律語からなる構造に写像される。アクセント型の実現形は、形態統語構造の違いにも関わらず、同一のアクセント型であれば同一であることがわかる。

韻律語を伴う韻律構造を仮定することによって、中和が生じない環境における、池間方言のアクセント型の実現形は(12)のように一般化することが可能となる。池間方言では、発話頭の韻律語にはアクセント型の違いに関わらず高ピッチが必ず分布するが、この高ピッチは型の対立には関与せず、2番目の韻律語以降に分布する高ピッチが弁別的である (Igarashi et al. forthcoming)。

(12) 池間方言のアクセント型の実現形(非中和環境)

- a. A型:1番目の韻律語に高ピッチが分布する
- b. B型:1番目と3番目の韻律語に高ピッチが分布する
- c. C型:1番目と2番目の韻律語に高ピッチが分布する

ここで「高ピッチが分布する」とは、「高ピッチが現れる」という意味であり、「韻律語全体が高ピッチとなる」ことを意味しない。池間方言では、高ピッチが分布する韻律語の後半部には一定の環境下で低ピッチが現れるが、低ピッチの有無はここでは問題にしない。低ピッチの実現は多くの場合、第4節に論じるフット構造が関与している<sup>6</sup>。詳細については Igarashi et al. (forthcoming) 参照。

<sup>6</sup> 高ピッチが分布する韻律語の後半部に低ピッチが現れる一定の環境には2種類ある。第1の環境は、1) 問題の韻律語が4モーラ以上であるという条件、および2) その韻律語がA型の語根(ただし複合語の後部要素となるA型の語根を除く)を含まないという条件を、同時に満たす環境である。この環境における低ピッチの実現には、フット構造(第4節参照)が関与している。例えば、4モーラの韻律語は2つのフットに分割されるが、その韻律語に高ピッチが分布する場合は、高ピッチは韻律語の冒頭のフットにのみ与えられ、他のフットには低ピッチが与えられる。C型の *bakjaai* 「別れ」に接語 *=bakaai* 「だけ」が後続した場合を例にとろう。この文節の韻律構造は、フット境界を“< >”で表すと、(<*ba.kja*><*a.i*>)(<*ba.ka*><*a.i*>)となる。高ピッチは韻律語の冒頭のフットにのみ与えられる。一方、韻律語が4モーラ以上でありかつ複合語の後部要素ではないA型の語を含む場合(上述の条件1を満たすが条件2を満たさない場合)は、問題の韻律語を構成するすべてのフットに高ピッチが分布するのが普通である。A型の *futaai* 「二人」に接語 *=bakaai* が後続した場合を例にとろう。この文節の韻律構造は、(<*fu.ta*><*a.i*>)(<*ba.ka*><*a.i*>)となり、高ピッチは韻律語のすべてのフットに与えられる。韻律語内部で高ピッチが4モーラ以上連続して分布する事例は、この場合しか見つかっていない。この4モーラ以上のA型の単純語の例外的なふるまいの原因は、おそらく通時論に求められるべきものであろう。第2の環境とは、1) 高ピッチが分布する問題の韻律語が3モーラ以下であり、2) かつそれが発話末に位置し、3) かつその韻律語がC型の語根(ただし複合語の後部要素となるC型の語根を除く)を含まないという条件を同時に満たす環境である。この場合、発話末のモーラに低ピッチが分布する。したがって池間方言では、大多数の環境において、発話末の韻律語の最終モーラは低ピッチを持つことになる。一方、(3)のC型の例および(18cf)のC型の例では、発話末モーラが高いピッチを持つが、これは発話末に位置する3モーラ以下の韻律語が、C型でありかつ複合語の後部要素でない語根(C型 *nabi* 「鍋」、C型 *umui* 「思い」)を含むためである。問題のピッチの低下現象は、発話末の韻律語に限定されているので、発話末のピッチを低下させる *final lowering* の結果であると思われるかもしれないが、そうではない。なぜならば発話末のピッチの低下の有無には、C型で



韻律語形成規則 (9) に反映されているように、池間方言と多良間方言では、形態統語論における語根と接語の区別が、韻律語を派生させる過程において意味を持たない。この事実を確認するために、2 モーラ単純語に2 モーラ接語が2 つ (奪格=*kara*, =*mai* 「も」) 後続する文節の単独発話 (13) を検討しよう。

- (13) A *butu=kara=mai*      B *hana=kara=mai*      C *nabi=kara=mai*  
 「夫からも」                      「花からも」                      「鍋からも」  
 (bu.tu)(ka.ra)(ma.i)              (ha.na)(ka.ra)(ma.i)              (na.bi)(ka.ra)(ma.i)

(13) も (11) と同様に3つの韻律語に写像される。またその実現形に (12) の一般化が成立する。3つの語根からなる複合語 (11a) も、語根2つからなり2モーラ接語が1つ後続した複合語 (11b) も、2モーラ接語が2つ後続する単純語 (13) も、全く同一の韻律構造に写像される。

池間方言のアクセント型の実現形が、文節を構成するモーラ数のみを参照する規則によって決定されているのではない事実は、(14) に明瞭に表されている。(14) は2モーラ単純語に4モーラ接語 (= *bakaai* 「だけ」) が後続する文節であり、文節全体が6モーラの長さを持つ点は (11a, 13) と同様である。もし型の実現形がモーラ数のみに基づいて決定されるのであれば、(11a, 13) と (14) は同一の実現形を持つはずであるが、そうならない。

- (14) A *butu=bakaai*      B *hana=bakaai*      C *nabi=bakaai*  
 「夫だけ」                      「花だけ」                      「鍋だけ」  
 (bu.tu)(ba.ka.a.i)              (ha.na)(ba.ka.a.i)              (na.bi)(ba.ka.a.i)

(14) ではA型とB型が中和しており、その実現形は、3種類の型の区別が実現される (11a, 13) とは明らかに異なっている。韻律語を仮定する枠組みを用いると、(14) は2つの韻律語に写像されることになるので、両者が異なる実現形を示す事実をとらえることができる。さらにこの枠組みは、(14) においてA型とB型が中和する事実をも説明することができる。すなわち、B型は、3番目の韻律語に高ピッチが分布することによってA型と区別されるが、(14) の環境下では3番目の韻律語が存在していないため、A型とB型が同一の実現形を有することになる (Igarashi et al. forthcoming)。

全体が6モーラの長さを持つ文節をもう1例検討しよう。(15) は4モーラ単純語に2モーラ接語 (= *mai* 「も」) が後続する文節である。

あるかそれ以外の型であるかという、アクセント型の対立が関与するためである。したがってこのピッチ低下は、その実現は特定の条件に限られるとはいえ、A型およびB型の語の有する弁別特徴であるとみなすべきであろう。(日本語弘前方言、雫石方言に関する類似の議論が服部 (1979b) にある。) いずれにせよ、この現象の背後にある原理の解明は今後の課題である。

- (15) A *futaai=mai*      B *maukjaa=mai*      C *bakjaai=mai*  
 「二人も」      「前も」      「別れも」  
 (**fu.ta.a.i**)(ma.i)      (**ma.u.kja.a**)(ma.i)      (**ba.kja.a.i**)(ma.i)

(14) と (15) は、名詞語根のモーラ数、接語のモーラ数の双方において異なるが、2モーラ以上の形態素2つから構成される点は同一であり、したがって韻律語形成規則 (9) によって同一の韻律構造に写像される。(14) と (15) が、韻律語に対する高ピッチの分布および、A型とB型が中和する点が共通している事実は、韻律語を仮定することで初めてとらえることができる<sup>7</sup>。

(14, 15) は、単純語に2モーラ以上の接語が後続する文節であった。一方、(16) は2モーラ以上の語根2つからなる複合語である。(14, 15) と (16) は、その形態統語構造は異なるが、2モーラ以上の語根・接語2つから構成される点は同じなので、2つの韻律語に写像される。高ピッチの分布も (14, 15) と (16) は同様である。

- (16) A *kuusu+hai*      B *cimma+hai*      C *gaura+hai*  
 「唐辛子畑」      「葱畑」      「苦瓜畑」  
 (**ku.u.su**)(ba.i)      (**ci.m.ma**)(ba.i)      (**ga.u.ra**)(ba.i)

(17) は、(15) に更に2モーラ接語 (具格 =*hii*) が付加された文節であり、したがって3つの韻律語を持つ。韻律語に対する高ピッチの分布は、同じく3つの韻律語からなるが全体のモーラ数が異なる (11, 13) と同様である。

- (17) A *butu=bakaai=hii*      B *hana=bakaai=hii*      C *nabi=bakaai=hii*  
 「夫だけで」      「花だけで」      「鍋だけで」  
 (**bu.tu**)(ba.ka.a.i)(hi.i)      (**ha.na**)(ba.ka.a.i)(hi.i)      (**na.bi**)(ba.ka.a.i)(hi.i)

韻律語形成規則 (9) により、1モーラの形態素は韻律語を形成することができず、先行韻律語に融合する。この1モーラ形態素の韻律的従属性のために、池間方言(および多良間方言)の韻律構造は、形態素境界のみを参照することで派生させることができない。このことを確認するために(18)を検討しよう。(18abc)は2モーラ単純語、(18def)はそれに1モーラ接語(主格 =*nu*)が後続した文節、(18ghi)は3モーラ単純語である。いずれの場合も2モーラ以上の語根・接語が1つしかないので、1つの韻律語に写像される。(18def)における1モーラ接語は、先行要素とともに1つの韻律語を形成するので、1つの語根のみから構成される韻律語(18abcghi)と同様に、A型とB型が中和する(Igarashi et al. forthcoming)<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> B型およびC型の語根を含む韻律語の後半に低ピッチが分布するのに対してA型の語根を含む韻律語の後半には高いピッチが分布することに関しては註6参照。

<sup>8</sup> 1つの韻律語を単独で発話した場合、3モーラ以下の韻律語ではA型とB型が中和するが、4モーラ以上(すなわち2フット以上)の韻律語ではすべての型が中和する(Igarashi et al. forthcoming)。例えばA型 *futaai* 「二人」、B型 *maukjaa* 「前」、C型 *bakjaai* 「別れ」はそれぞれ、(<fu.ta><a.i>), (<ma.u><kja.a>), (<ba.ka><a.i>)となる。

- (18) a. A *butu*            b. B *hana*            c. C *nabi*  
       夫                    花                    鍋  
       **(bu.tu)**            **(ha.na)**            **(na.bi)**
- d. A *butu=nu*        e. B *hana=nu*        f. C *nabi=nu*  
       夫=が<sup>s</sup>            花=が<sup>s</sup>            鍋=が<sup>s</sup>  
       **(bu.tu.nu)**        **(ha.na.nu)**        **(na.bi.nu)**
- g. A *agai*            h. B *munui*        i. C *umui*  
       東                    言葉                思い  
       **(a.ga.i)**            **(mu.nu.i)**        **(u.mu.i)**

(19abc) は 3 モーラ語根と 2 モーラ語根からなる複合語に 1 モーラ接語 (主格 =*nu*) が後続した文節である。1 モーラ接語は先行する韻律語に融合するので、これらの文節は、3 モーラからなる韻律語 2 つに写像される。その構造は、3 モーラ語根 2 つからなる複合語が写像される構造 (19def) と全く同一となる。

- (19) a. A *kuusu+bai=nu*    b. B *cimma+bai=nu*    c. C *gaura+bai=nu*  
       唐辛子+畑=が<sup>s</sup>        葱+畑=が<sup>s</sup>            苦瓜+畑=が<sup>s</sup>  
       **(ku.u.su)(ba.i.nu)**    **(ci.m.ma)(ba.i.nu)**    **(ga.u.ra)(ba.i.nu)**
- d. A *hinna+nuuma*        e. B *kicigi+minaka*    f. C *gabaa+sabani*  
       変な+馬            綺麗な+庭            大きな+割船  
       **(hi.n.na)(nu.u.ma)**    **(ki.ci.gi)(mi.na.ka)**    **(ga.ba.a)(sa.ba.ni)**

### 3.3. 多良間方言における韻律語

次に多良間方言における韻律語形成と型の実現形を検討しよう。多良間方言の単純語の単独発話では、すべての型が中和してしまう (松森 2010, 2014; 青井 2012; 五十嵐 2015)。これは、発話末のモーラのピッチを低める *final lowering* 規則がこの方言に存在するためである (五十嵐 2015)。非発話末の文節では、それが 2 モーラ以上の語根・接語 2 つ以上からなるとき、3 種類の型が区別される。以降、非発話末の文節のみを検討する。

(20) は 2 モーラ単純語に 2 モーラ接語 (= *mai* 「も」) が接続し、さらに述語 (たとえば *mii-rai-r* 「見える」) が後続した場合の実現形である。(以下、述語の表記は省略し、“…”によって、述語が後続することを表す。)

- (20) A *butu=mai...*    B *pana=mai...*    C *nabi=mai...*  
       「夫も…」        「花も…」        「鍋も…」  
       **(bu.tu)(ma.i)**    **(pa.na)(ma.i)**    **(na.bi)(ma.i)**

池間方言と同様に、多良間方言に韻律語形成規則 (9) が適用されると、(20) の文節は 2 つの韻律語からなることになる。

多良間方言のアクセント型の実現形は (21) のように一般化することができる (松

森 2014, 2015; 五十嵐 2015)。ここで「下がり目」とは高から低へのピッチ変化のことである。ピッチ変化はモーラ間で行われるが、本稿では低ピッチとなるモーラの直前のモーラに「下がり目がある」と表現する。

- (21) A型: どこにも下がり目のない型  
 B型: 2番目の韻律語の次末モーラに下がり目のある型  
 C型: 1番目の韻律語の次末モーラに下がり目のある型

(22) は 2 モーラ語根 2 つからなる複合語に 2 モーラ接語が後続した文節である。3 つの韻律語を有するこれらの文節にも、(21) の一般化が成立する。

- (22) A *mizi+kami=mai...*    B *mami+kii=mai...*    C *waa+msu=mai...*  
 水+瓶=も                      豆+木=も                      豚+味噌=も  
 「水瓶も…」                  「豆の木も…」                  「豚味噌も…」  
 (mi.dzi)(ga.mi)(ma.i)        (ma.mi)(gi.i)(ma.i)        (wa.a)(m.eu)(ma.i)

アクセント型の実現形が、文節全体のモーラ数・音節数ではなく、韻律語の数に基づいて決定される事実は (23) で確認できる。(23) は、4 モーラ単純語に 2 モーラ接語が後続しているの、全体のモーラ数は (22) と同様に 6 であるが、韻律語の数は 2 である。アクセント型の実現形は、全体のモーラ数は同じであるが韻律語の数が異なる (22) とは一致せず、全体のモーラ数は異なるが韻律語の数が同じである (20) と一致する。

- (23) A *jutaar=mai...*    B *tookaa=mai...*    C *pambim=mai...*  
 「4人も…」                  「1人も…」                  「天ぷらも…」  
 (ju.ta.a.l)(ma.i)              (to.o.ka.a)(ma.i)              (pa.m.bi.m)(ma.i)

池間方言と同様に、多良間方言では、1 モーラ形態素は独立の韻律語を形成することができない (松森 2014, 2015; 五十嵐 2015)。(24) に示すように、1 モーラ形態素は先行する韻律語に融合される。(24) の文節は、全体のモーラ数の違いや形態統語構造の違いに関わらず、韻律語形成規則 (9) によって、2 つの韻律語に分割される。

- (24) a. A *agar=kara=du...*    B *avva=kara=du...*    C *katana=kara=du...*  
 東=奪格=焦点                  油=奪格=焦点                  刀=奪格=焦点  
 「東から…」                  「油から…」                  「刀から…」  
 (a.ga.l)(ka.ra.du)              (a.v.va)(ka.ra.du)              (ka.ta.na)(ka.ra.du)
- b. A *agar=nu=gami=du...*    B *avva=nu=gami=du...*    C *katana=nu=gami=du...*  
 東=主格=対比=焦点              油=主格=対比=焦点              刀=主格=対比=焦点  
 「東が…」                      「油が…」                      「刀が…」  
 (a.ga.l.nu)(ga.mi.du)            (a.v.va.nu)(ga.mi.du)            (ka.ta.na.nu)(ga.mi.du)

以上、(20, 22, 23, 24) から明らかなように、多良間方言のB型とC型の下がり目の位置は、モーラ数のみから予測することも、形態素境界のみから予測することもできない。多良間方言のアクセント型の実現形は、韻律語を仮定してはじめて正しく予測することができる。

## 4. 理論的考察

### 4.1. 本稿の「韻律語」の地位

前節までに、池間方言と多良間方言のアクセント型の実現形は、本稿が韻律語と呼ぶ単位を仮定しなければ記述できないことを示した。このような韻律範疇を定義しかつこれを韻律語と名付ける試みは、日本語・琉球語諸方言の研究では、宮古語諸方言に関する最近の研究 (Igarashi et al. forthcoming; 松森 2015; 五十嵐 2015) を除いてなされたことがない<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 韻律語という韻律範疇を宮古語諸方言に提案するに至るまでには、2013年から2014年にかけての筆者と松森晶子氏との公式・非公式の議論がある。池間方言において2モーラ接語と単純語とが韻律上同じようにふるまうことは、筆者らによる研究 (Igarashi et al. 2011; 五十嵐他 2012) によって初めて示された。さらに、単純語と接語とを同一の韻律範疇に写像する規則を提案し、これを韻律語と初めて名付けたのは筆者らが2012年12月に脱稿した Igarashi et al. (forthcoming) の初稿である。この初稿で筆者らは、動詞接辞が韻律語を形成しない事実を報告し、かつ、韻律語に加えてフットを定義する独立の証拠があることを示したが、複合語の語根が単純語と同一の韻律範疇に写像される事実は指摘していなかった。一方、同じく宮古語の下位方言である与那覇方言において、複合語を構成する語根が、単純名詞および接語と同一の韻律範疇を形成することを指摘したのは松森晶子氏である (松森 2013)。Igarashi et al. (forthcoming) の最終稿 (2014年12月脱稿) において筆者らは、複合語の語根に関する松森 (2013) を援用して、池間方言の写像規則を、単純語と接語に加えて複合語の語根が韻律語に写像される規則へと改訂した。ただし、この最終稿には、たしかに松森 (2013) が引用されているが、語根に関する松森晶子氏の見解を援用した事実が明記されていない。この場を借りて、改訂の際には松森晶子氏の語根に関する着想が反映されていることを明記したい。なお、松森晶子氏の与那覇方言の研究 (松森 2013) では、接辞に関する議論は行われていないため、与那覇方言における接語と接辞のふるまいの違いは不明のままである。松森晶子氏は与那覇方言における問題の韻律範疇を音調領域と呼んだが、後に多良間方言の記述に同様の韻律範疇を導入し、これを韻律領域と呼び変えている (松森 2014)。さらに松森晶子氏は、宮古語および八重山語諸方言の記述に問題の韻律範疇を導入し、前述の筆者らが2012年に脱稿した Igarashi et al. (forthcoming) の初稿と、筆者の多良間方言の論文 (五十嵐 2015) を引用する形で、これを韻律語と呼んでいる (松森 2015)。ところで、私見では、松森晶子氏が宮古語および八重山語諸方言に提案する韻律範疇 (松森 2013, 2014, 2015) が、フットではなく韻律語とみなすのが妥当か否かを判断するためには、さらなる証拠が必要である。同じことは筆者が多良間方言に提案した韻律語 (五十嵐 2015) にも言える。なぜならば、これらの方言における問題の韻律範疇は unbounded foot とみなすことも可能であるように思われるからである。一方、池間方言には、本稿 4.2 節に示すように、韻律語に加えてフットを定義する独立の根拠がある。具体的には、池間方言の韻律階層において (本稿で定義された) 韻律語とモーラの中間に位置する韻律範疇を領域とする独立の韻律的過程 (すなわち HL Alternation) が存在するので、この単位をこそフットと呼ぶことができる。管見の及ぶ限り、その他の宮古語や八重山語の諸方言に、このような中間的韻律範疇を領域とする独立の韻律的過程は報告されていない。現時点では、他の宮古語や八重山語の諸方言における問題の韻律範疇は、「特定の韻律的過程の領域となり、かつ韻律階層においてモーラより上位に位置する」ものとしか定義できない。したがって、これを韻律語と呼ぶかフットと呼ぶかの議

従来の研究 (Igarashi et al. forthcoming; 五十嵐 2015) において、筆者がこのような韻律範疇を定義したのは、根本的には記述的要請を満たすためであった。しかしながら、「韻律語」(ないし「音韻語」(Phonological Word)) という概念が、あらゆる言語の記述的研究に加えて、韻律構造に関する普遍的理論の構築を目的とした研究 (e.g. Selkirk 1984; Nespor and Vogel 1986) に導入されてきたものであることを勘案すると、それらの研究で定義された韻律語との異同が問題となりうる。本稿の韻律語は音韻理論上あるいは類型論上どのような地位を占めるのか、当該の韻律範疇を韻律語とみなすのは妥当かなどの問いに答えることは不可避であろう。しかしながら、池間方言と多良間方言に関する現時点の知見に基づく限り、この問題を十分に議論することは困難である。本節では、将来この課題に本格的に取り組むための土台となる議論を提供することを目的とする。

本稿の提案した韻律語形成規則 (9) は、1 モーラ形態素を除いて、複合語を構成する語根 1 つ 1 つと、接語の 1 つ 1 つとに、1 つの単純語 (語根 1 つからなる語) と同等の韻律的独立性を与えている。このことは (25) の形に要約できる。

- (25) a. 1モーラ形態素の従属性(1モーラ形態素は独立の韻律範疇とならない。)  
 b. 語根の独立性(複合語の語根の1つ1つが、1つの単純語と同じ韻律範疇となる。)  
 c. 接語の独立性(接語の1つ1つが、1つの単純語と同じ韻律範疇となる。)

この種の韻律的従属性・独立性を兼ね備えた韻律範疇に韻律語の地位を与えることには異論があるだろう。それぞれを詳しく検討してみよう。

1 モーラの形態素はいかなるものであれ、問題の韻律範疇に写像されず、先行する単位に融合される (25a)。この 1 モーラ形態素の韻律的従属性は、最適性理論を用いる研究では、Foot Binariness Constraint (Prince and Smolensky 2004) や Word-Minimality Constraint (Ito 1990) と呼ばれる制約として知られている。この制約によって、モーラを支配する韻律範疇は、フットであれ韻律語であれ、1 モーラから構成されることを禁じられる。この制約は世界の諸言語に広範に観察されるものであり、池間方言と多良間方言における韻律語形成にも認められる。韻律語を派生さ

---

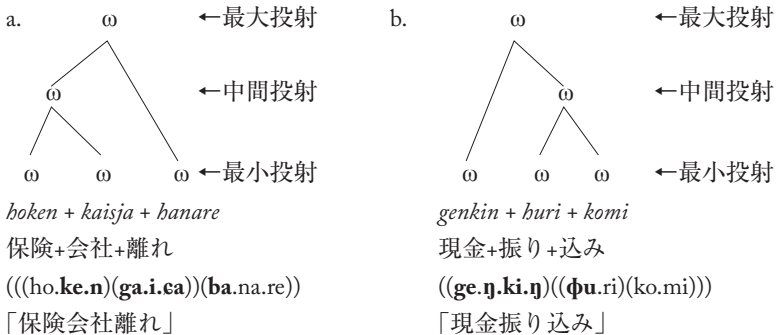
論は単なる術語の問題になりかねない。特に、モーラ・フット・韻律語という韻律階層があらゆる言語に普遍的に認められるとする立場 (でかつ unbounded foot を認める立場) をとるならば、問題の韻律範疇は、階層的にモーラの直上に位置するという事実から、まさにフット (unbounded foot) であるということになるだろう。この見解に反論するためには、韻律語とモーラとの間に位置する韻律範疇を領域とする韻律的過程を新たに発見するか、あるいは問題の韻律範疇が他の多数の言語で韻律語と名付けられている韻律範疇と同じ性質を有することを、新たな証拠に基づいて主張することが必要になるだろう。なお、他の宮古語、八重山語諸方言における問題の韻律範疇を unbounded foot とみなす立場をとると、一種の不整合性が生じることになる。すなわち、同等の写像規則によって派生される韻律範疇にも関わらず、池間方言の場合はそれを韻律語とみなし、他の諸方言ではそれがフットとみなすという不整合性である。この不整合性は、後述する再帰的な韻律構造を許す枠組みを用い、池間方言における問題の韻律範疇をフット (の最大投射) とみなすことで、解消される可能性がある。

せる写像規則に1モーラ形態素の韻律的従属性を反映させるのは極めて一般的である。

それに対して、複合語を構成する個々の語根を、単純語と同一の韻律範疇に写像させる過程(25b)は、日本語・琉球語諸方言に関する限り、広範に観察されるものではないと思われる。少なくとも複合語の語根が、そのアクセント型に関わらず、また2モーラ以上であればその長さに関わらず、単純語相当の韻律範疇に一樣に写像される過程はそれほど一般的ではないと思われる。一方で Ito and Mester (2007) によると、東京方言の複合語におけるアクセント核の分布を計算するためには、複合語の語根の1つ1つを、彼らが韻律語と呼ぶ韻律範疇に写像する必要があるという。彼らの枠組みでは1つの単純語と、複合語の個々の語根とが、同一の韻律範疇すなわち韻律語に写像される。この点で本稿と Ito and Mester (2007) は共通している。したがって語根の1つ1つが写像される韻律範疇を韻律語と位置付ける本稿の試みは決して特異なことではないと言えるだろう。

ただし Ito and Mester (2007) は、同一の韻律範疇が同一の韻律範疇を支配する(例えば韻律語が韻律語を支配する)ことができる「再帰的韻律構造」(recursive prosodic structure, Ladd 1986; Kubozono 1988)を採用している。この枠組みでは、(26)に示すように、複合語の語根がそれぞれ写像される韻律語(韻律語の最小投射)が、さらに韻律語の中間投射を形成してゆき、最終的に(彼らが phrasal compound と呼ぶ複合を除き)複合語全体が韻律語の最大投射を形成する。

(26) Ito and Mester (2007: 6) の再帰的韻律構造(ωは韻律語を表す。表記は一部改変。)

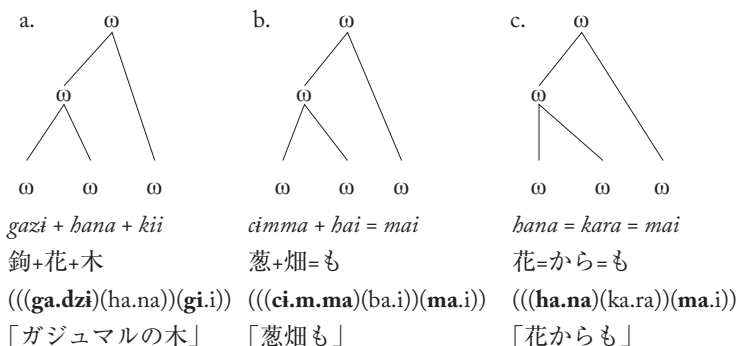


この韻律構造における再帰(prosodic recursion, 彼らの用語では prosodic adjunction)を許す枠組みでは、韻律語の最大投射が、複合語のアクセント規則が適用される領域となる。したがってこの枠組みは、韻律語という韻律範疇をアクセント型付与の領域と定義できるという利点をも持つということができる。一方、本稿の韻律語はアクセント型付与の領域ではない。池間方言と多良間方言のアクセント型付与の領域がいかなるものであるかを示すのは本稿の射程を超える。Igarashi

et al. (forthcoming) では池間方言における型付与の領域は、日本語学で文節と呼ばれている単位と一致すると仮定されている。少なくとも、型付与の領域は本稿が定義する韻律語より大きな単位であるのは間違いない。しかしながら、(27)のように、本稿の枠組みを再帰的韻律構造を許すものに改定すれば、韻律語の最大投射をアクセント型付与の領域と定義することは、少なくとも池間方言に関する限り、可能であると考えられる。

(27) では形態統語構造は異なるが、(2モーラ以上の)語根・接語が合計3つ連続する池間方言の文節の韻律構造を、再帰的韻律構造を伴う枠組みを用いて表現したものである。アクセント型はすべてB型である。(12)に要約したように、B型では1番目(発話冒頭)の韻律語と3番目の韻律語に高ピッチが分布するが、弁別的であるのは3番目の韻律語に分布する高いピッチである。これを「3番目の韻律語に高ピッチを付与せよ」という規則の形で定式化することができるのであれば、この規則の適用される領域は、韻律語の最大投射ということになる。また、高ピッチの付与される「韻律語」とは、すなわち韻律語の最小投射ということになる。

(27) 再帰的韻律構造を許す枠組みを適用した場合の池間方言の韻律構造



以上のように、語根の取り扱いに関する限り、特に Ito and Mester (2007) の再帰的韻律構造を伴う枠組みを適用するのであればなお、本稿の提案する韻律語には重大な理論的問題はないように思われる。ただし、Ito and Mester (2007) は接語のふるまいを検討していない。(27) では2モーラ接語 (=kara「から」, =mai「も」)を、語根 (gazi「鉤」, cimma「葱」, hana「花」等)と同様に、韻律語の最小投射に写像しているが、このような扱いが妥当であるかは議論の余地がある。ここで、接語の独立性 (25c) に関する議論に移ることにしよう。

池間方言と多良間方言では、形態素境界から韻律範疇境界を写像する過程において、2モーラ以上の接語 (=kara「から」, =mai「も」等)と語根とが類似のふるまいを見せることから、本稿では接語のみからなる韻律単位にも韻律語の地位を与えている。この点には大いに議論の余地があるだろう。たしかに東京方言などいくつかの日本語諸方言では、特定の接語が特定の条件下において、語根と同一の



韻律的独立性を有することがある（奥村 1956; Kubozono 1988; Maekawa and Igarashi 2007; Vance 2008; Igarashi 2015）。例えば *nagoja=made*（「名古屋まで」）は、(na.go.ja.ma.de) のように1つの韻律範疇（「アクセント句」などと呼ばれる）に融合されることもあるが、(na.go.ja) (ma.de) のように2つの韻律範疇に分割されることもある。しかしそのような現象は多くの場合、接語それ自体にアクセント型の対立があることや、接語に強調が置かれることなどの諸条件が揃って初めて観察されるものである。池間方言と多良間方言の接語は、これまでの知見に基づく限り、アクセント型の対立を持たない。また同方言では、強調などの付加的要因の有無にかかわらず、2モーラ接語は単純語1つと同一の韻律範疇に写像される。私見では、本稿の提案する韻律範疇を韻律語とみなすことの最大の問題点は、この韻律範疇が、語根1つだけでなく、接語1つからも構成されることにある。

一般的に接語は、その統語的分布に加えて、音韻論的不完全性によって定義され、通常の語とは区別される（Nespor and Vogel 1986）。池間方言と多良間方言では、語根は通常2モーラ以上であるのに対して、大部分の接語は1モーラであり、1モーラ接語は先行要素に韻律的に融合する。（具体的には独立の韻律語を形成できず、先行する韻律語に融合される）。したがって、接語のうち少なくとも1モーラのもの、典型的な音韻論的不完全性に特徴づけられる。また、2モーラ接語にも音韻論的不完全性を認めることができる。それはアクセント型の対立の欠如である。前述のように接語には（そのモーラ数に関わらず）アクセント型の対立がない。一方語根は、1モーラ接語に観察されるような先行要素への韻律的融合は観察されず、また、基底表示においてアクセント型（A型、B型、C型のいずれか）が指定されている。したがって語根には、接語が示すような典型的な音韻論的不完全性は認められない。音韻論的不完全性において対照をなすように一見思われる接語と語根とを同一の韻律範疇に写像する本稿の枠組みには異論があるに違いない。

しかしながら、（1モーラであれ2モーラであれ）接語に観察されるものと同様の音韻論的不完全性が、語根にまったく観察されないわけではない。語根に観察される音韻論的不完全性とは、複合語の後部要素となる語根のアクセント型の対立が表層において消失する性質である。例えば、池間方言の複合語 *aka+mami+kii*（赤+豆+木「小豆の木」）を構成する3つの語根にはそれぞれのアクセント型が基底で指定されているが（*aka*「赤」A型；*mami*「豆」B型；*kii*「木」B型）、複合語を形成する際に、2番目以降の語根のアクセント型は全く無視され、1番目の語根の型（この場合A型）が複合語全体の型となる。日本語学で「一般複合法則」（Поливанов 1928; 平山 1951; 上野 1984, 2012）と呼ばれるこの過程は、池間方言と多良間方言だけでなく、宮古語諸方言に広く認められる（松森 2013, 2014, 2015; Igarashi et al. forthcoming; 五十嵐 2015）。したがって、語根と接語は、表層におけるアクセント型の対立の欠如という点において、同程度の音韻論的不完全性を有すると言うことができるだろう。この点を重視するならば、（2モーラ）接語のみから構成される単位に韻律語の地位を与えるのはそれほど非合理であるとは思われない。

以上、本稿が提案した韻律的単位に、韻律語という韻律範疇の地位を与えることには、一定の妥当性があることを示した。もう1つ検討すべき問題がある。問題の韻律範疇は韻律語ではなくフットとみなすことは可能であろうか。もしフットとみなすことができるのであれば、上で論じた問題のすべてが解消される可能性がある。

#### 4.2. 池間方言のフット

韻律階層を扱う音韻理論 (Selkirk 1984; Nespor and Vogel 1986 など) では一般的に、モーラ (および音節) を支配する韻律範疇としてフットが定義されている。フットは、それが支配するモーラないし音節の数の制限によって bounded foot と unbounded foot の2種類に分類される (Halle and Vergnaud 1987)。Bounded foot とはフットを構成するモーラ数・音節数に制限があるフットであり、典型的には2モーラないし2音節から構成される。一方 unbounded foot とはそのような制限がないフットである。本稿が韻律語と呼ぶ韻律範疇は、3モーラや4モーラ、あるいはそれ以上から構成される。したがって、もしこの韻律範疇をフットとみなすことができるのなら、そのフットは unbounded foot ということになる。

筆者はかつて、多良間方言のアクセント型の実現形は、2モーラフット (すなわち bounded foot) を導入しても正しく記述できない事実に基づいて、フット説を退けたが (五十嵐 2015)、unbounded foot の可能性は検討していない。多良間方言に関する限り、問題の韻律範疇を unbounded foot とみなすことができる可能性は大いにある。一方、池間方言に関しては、フット説に対する一定の反論が可能である。近年の研究ですでに指摘されているように (Shimoji and Hayashi 2008; Hayashi et al. 2008; Igarashi et al. forthcoming)、池間方言には、本稿の提案する韻律語に加えて、2モーラ (特定の条件下で3モーラ) からなるフット (すなわち bounded foot) が存在していることを示唆する独特の韻律現象がある。それは下地理則氏が、池間方言と同じく宮古語の下位方言である伊良部長浜方言 (以降、伊良部方言) にはじめてその存在を報告した、Rhythmic Alternation (Shimoji 2009)、のちに HL alternation (Shimoji and Hayashi 2008) と呼ばれる韻律現象である。

伊良部方言はアクセント型の対立のない方言であるが、下地理則氏によると発話のピッチはフット構造によって決定される。伊良部方言のフットは2モーラ (特定の条件下で3モーラ) を支配する韻律範疇であるが、概略的に言えば、1) 2モーラ以上の形態素にフット境界を挿入し、2) 左から右へ反復的に2モーラを1フットにまとめ、3) 余った1モーラは先行フットに融合させるという規則によって形成される (Shimoji 2009)。この規則により、例えば2モーラの形態素は2モーラフット1つを形成し、3モーラ形態素は3モーラフットを1つ形成し、4モーラの形態素は2モーラフットを2つ形成する。フット境界を“< >”で表すと、伊良部方言のフット構造は (28) のように例示することができる (Shimoji 2009, 表記は一部改変)。

- (28) a. *kan-gama-mmi-nagi*                      b. *pav-gama=kara=mai*  
 蟹-指小-複数-など                      蛇-指小=から=も  
 「カニなど」                              「蛇からも」  
 <ka.n><ga.ma><m.mi><na.gi>              <pa.v><ga.ma><ka.ra><ma.i>
- c. *ami+fii+pammai*                      d. *akjaada-gama=kara*  
 雨+降り+食料                              商人-指小=から  
 「雨天時の食料」                          「商人から」  
 <a.mi><fi.i><ba.m><ma.i>                      <a.kja><a.da><ga.ma><ka.ra>

(28c) では *pammai* 「食料」が, (28d) では *akjaada* 「商人」が 4 モーラ形態素であるが, これらは 2 フットを形成する。(28) から明らかなように, 語根, 接語, 接辞の区別はフット形成に関与しない。

伊良部方言のピッチは, このフット構造を参照する規則によって決定される。具体的には, 奇数番目のフットに高ピッチが, 偶数番目のフットには低ピッチが付与される。ただしフット数が奇数個の場合, 最後のフットには低ピッチが与えられる。この規則が適用されると, 発話には高ピッチと低ピッチの規則的な交替, すなわち HL Alternation が認められるようになる。

Shimoji (2009) によるとこの HL Alternation は, Selkirk (1984: 12) が「2つの連続する強いビートの間には, 最小 1 つ, 最大 2 つの弱いビートが存在する」と定式化する Principle of Rhythmic Alternation という原理にしたがうものであるという。伊良部方言の場合, 強いビートと弱いビートとはそれぞれ高ピッチを持つフットと低ピッチを持つフットに相当する。

池間方言にも HL Alternation が観察される。池間方言の HL Alternation は動詞に顕著に認められる<sup>10</sup>。池間方言の HL Alternation を考察する前に, 同方言の動詞のアクセント型が, 名詞のアクセント型と同じ規則によって実現されていることを確認しよう。

池間方言の動詞は A 型と C 型が対立し, B 型は欠如している (Igarashi et al. forthcoming)。 (29) は 2 つの語根から形成される複合動詞に 2 モーラ接語 (= *hazī* 「だろ」<sup>11</sup>) が後続したものである。3 つの韻律語に写像されるこの発話の高ピッチの

<sup>10</sup> 後述するように HL Alternation は低ピッチのフットが 3 つ以上連続して初めて観察される。名詞でそのような条件を作り出すのは困難である。なぜならば, 長い名詞のほとんどは複数の語根からなる複合語であり, ほとんどの名詞語根は 3 モーラ以下であるためである。池間方言では, 語根は韻律語に写像され, その韻律語の一部にアクセント型の対立に関わる高ピッチが与えられるので, 名詞において低ピッチのフットが 3 つ以上連続することがほとんどない。名詞接辞を付与することによって HL Alternation の生じる条件を作り出すことは可能であると思われるが, 池間方言の名詞接辞の韻律的なふるまいは不明である。ただし名詞に HL Alternation が観察されないわけではない。長い外来語を伴う文節 (例えば C 型 *furu+ookesitora=mai* 「フルオーケストラも」) には HL Alternation (<fu.ru>)(<o.o><ke.si><to.ra>)(<ma.i>) が観察される。下線を引いた高ピッチは HL Alternation によって与えられる。

<sup>11</sup> 本稿は *hazī* 「はず」を接語として分析しているが, 例えば (30bdf) に示されているように,

分布にも (12) の一般化が成立する。すなわち、発話頭の韻律語に高ピッチが分布することに加えて、C型では2番目の韻律語に高ピッチが分布する。

- (29) a. A *ibi+ur=hazi*                      b. C *idi+ur=hazi*  
 植える+居る=だろう                      出る+居る=だろう  
 「植えているだろう。」                      「出ているだろう。」  
 (i.bju)(u.i)(ha.dzi)                      (i.dzu)(u.i)(ha.dzi)

次に、接辞を動詞語根に付与することにより、4モーラ以上からなる韻律語が形成される発話を検討しよう。(30)は1つ以上の接辞を動詞語根に付与して、さらに接語を後続させた発話である。接辞境界は韻律語境界に写像されないので、動詞語根1つと2モーラ接語1つを有する(30)の発話は、韻律語2つから形成されることになる。

- (30) a. A *ibi-tai=hazi*                      b. C *idi-tai=hazi*  
 植える-過去=だろう                      出る-過去=だろう  
 「植えただろう。」                      「出ただろう。」  
 (i.bi.ta.i)(ha.dzi)                      (i.di.ta.i)(ha.dzi)
- c. A *ibi-rai-tai=hazi*                      d. C *idi-rai-tai=hazi*  
 植える-受動-過去=だろう                      出る-受動-過去=だろう  
 「植えられただろう」                      「出られただろう」  
 (i.bi.ra.i.ta.i)(ha.dzi)                      (i.di.ra.i.ta.i)(ha.dzi)
- e. A *ibi-ssas-rai-tai=hazi*                      f. C *idi-ssas-rai-tai=hazi*  
 植える-使役-受動-過去=だろう                      出る-使役-受動-過去=だろう  
 「植えさせられただろう。」                      「出されただろう」  
 (i.bi.s.sa.ha.i.ta.i)(ha.dzi)<sup>12</sup>                      (i.di.s.sa.ha.i.ta.i)(ha.dzi)

(30)における高ピッチの分布を検討しよう。A型は発話の最初の韻律語に高ピッチが分布するはずであるが、実際に(30ace)では最初の韻律語の冒頭に高ピッチが与えられている。一方、C型の発話は最初の韻律語と2番目の韻律語に高ピッチが与えられるはずであるが、(30bdf)では実際にそのようになっている。これらの

この形態素は高ピッチが分布する際に、たとえ発話末に位置しても、最終モーラが低くならない。これは、3モーラ以下のC型の名詞が発話末に位置した場合のふるまいと一致する(註6参照)。すなわち、この形態素の音韻論的なふるまいは名詞語根のそれと一致する。*hazi*が他の名詞と同一ないし類似のふるまいを統語的にも示すのか否か(名詞句の主要部を担えるか否か等)を今後検討する必要がある。例えば、池間方言の*hazi*が、伊良部方言に関してShimoji(2008)が「形式名詞」(formal noun)に分類する*tukja*「時」、*kutu*「事」(池間方言と伊良部方言で同形)などと統一的に扱えるか否かを検討する必要があるだろう。もし*hazi*の統語的ふるまいが他の名詞と類似しているのであれば、この形態素は接語ではなく名詞と分析できるようになるだろう。なお下地(2008)は、伊良部方言の*pazi*「はず」(池間方言の*hazi*に対応)を接語として分析している。

<sup>12</sup> 接辞-ssasと接辞-raiの連続は、形態音韻論規則によって/ssahai/に変化する。



結果として (32) の右側に示したように, (32cef) には下線で示した高ピッチが新たに与えられることになる。((32, 33) の “→” は HL Alternation が適用されたことを表す。)

池間方言の HL Alternation は, 伊良部方言と同様に, Principle of Rhythmic Alternation (Selkirk 1984) に従うものであると考えられる。ただし, アクセント型の対立のない伊良部方言とは異なり, 池間方言の発話のピッチは, アクセント型と HL Alternation との相互作用によって決定される。したがって池間方言には, 伊良部方言のような高ピッチのフットと低ピッチのフットが規則的に反復するパターンが, 常に認められるとは限らない。Principle of Rhythmic Alternation は「強いビート」すなわち高ピッチのフットが2つ連続することを禁止するが, 池間方言ではアクセント型によってはそれが許される (例えば (29b) 参照)。しかしながら, 池間方言は, 伊良部方言と同様に, 低ピッチのフットが3つ連鎖することが禁じられる。これは, 「弱いビート」すなわち低ピッチのフットの連続は最大で2つであるとする Principle of Rhythmic Alternation の作用であるとみなすことができる。

池間方言では, アクセント型の対立に関わるピッチは韻律語レベルで付与されるが, HL Alternation に関わるピッチはフットレベルで付与される。韻律語とフットとが異なる韻律的過程の領域となる事実は, フットに加えて韻律語という独立した韻律範疇を池間方言に定義する根拠となる。したがって, 本稿が韻律語と呼ぶ韻律範疇をフット (unbounded foot) とみなすことは直ちにはできない。ただし, 4.1 節で論じたような再帰的韻律構造を許す枠組み (Ito and Mester 2007) を用いることによって, 問題の韻律範疇をフットとみなすことが可能となるかもしれない。例えば, フットの最大投射をアクセント型の対立に関わるピッチの付与される単位とし, フットの最小投射を HL Alternation に関わるピッチを担う単位とみなすような枠組みである。再帰的韻律構造を伴う枠組みを含め, 本稿が提案したものに代わりうる複数の枠組みの優劣を論じるのは将来の課題である。

## 5. 結論

本稿が示したように, 池間方言と多良間方言には, 2モーラ以上の語根・接辞が写像される韻律範疇である韻律語が存在し, これを考慮しない限り, 両方言の韻律構造を正しく記述できない。松森晶子氏は, 本稿の韻律語に相当する韻律単位を仮定することにより, これまで二型とみなされてきた宮古語与那覇方言と宮古語狩俣方言の体系が, 三型であることを明らかにした (松森 2013, 2015)。本稿が韻律語と呼んだ韻律範疇は宮古語諸方言に広範に観察される可能性がある。加えて松森晶子氏は, 同様の方法を用いた分析で, 八重山語の諸方言 (黒島方言など) のいくつかは, 二型体系を有するとする従来の主張とは異なり, 三型体系を有すると主張している (松森 2015)。今後, 南琉球諸語 (宮古語, 八重山語, 与那国語) のアクセント体系の調査を行う際には, 韻律語を伴う韻律構造を考慮することが必須であろう。少なくとも, 従来広く用いられてきた「名詞・接語フレーム」は南琉球諸語の

調査のための道具立てとしては不十分である。

加えて本稿は、問題の韻律範疇に「韻律語」の地位を与えるのは妥当であるか否かという問題を論じた。この問題に最終的な答えを与えるのは今後の課題となる。

池間方言と多良間方言の韻律構造には不明な点が多く、更なる研究を要する。特に、より長い発話においてアクセント型がどのように実現されるかは十分に解明されていない。池間方言には、第4節に論じたようなフットレベルでのピッチの交替現象である HL Alternation に加えて、Igarashi et al. (forthcoming) が Rhythmic Alternation II と呼ぶ、韻律語レベルでのピッチの交替現象がある。また松森晶子氏が最近報告したように、多良間方言には、より大きな韻律範疇レベルでのピッチの交替現象が観察されるようである(松森 2016)。両方言ともにその韻律構造の包括的な記述は将来に残された課題である。

## 参 照 文 献

- 青井隼人 (2012) 「宮古多良間方言の三型アクセント体系」『第 26 回日本音声学会全国大会予稿集』7-12.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化研究』8: 1-43.
- 五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ベラルトマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1): 134-148.
- 上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会 (編) 『現代方言学の課題 2: 記述的研究篇』167-209. 東京: 明治書院.
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」杉藤美代子 (編) 『講座日本語と日本語教育 2: 日本語の音声・音韻 (上)』178-205. 東京: 明治書院.
- 上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.
- 奥村三雄 (1956) 「辞の形態論的性格」『国語国文』25(9): 539-552.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究: 原理と方法』東京: 塙書房.
- 崎村弘文 (2006) 『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』東京: 明治書院.
- 下地賀代子 (2006) 「多良間方言の空間と時間の表現」博士論文, 千葉大学.
- 服部四郎 (1979a) 「日本祖語について 21-22」『言語』8(11): 97-107; 8(12): 504-516.
- 服部四郎 (1979b) 「表層アクセント素と基底アクセント素とアクセント音調型」『言語の科学』7: 71-96.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』東京: 学界之指針社.
- 平山輝男 (1964) 「琉球宮古方言の研究」『国語学』56: 61-73.
- 平山輝男 (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京: 桜楓社.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 桜楓社.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 (監) 『日本語研究 12 章』490-503. 東京: 明治書院.
- 松森晶子 (2012) 「琉球語調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16(1): 30-40.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における 3 型アクセント体系の発見—与那覇方言の場合—」『国立国語研究所論集』6: 67-92. 東京: 国立国語研究所.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要文学部』63: 13-36.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系—その韻律単位に関する考察—」『日本女子大学紀要文学部』64: 55-92.
- 松森晶子 (2016) 「多良間島における文のプロソディー: 韻律句が連なる場合の音調交替現象について」キックオフワークショップ「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」, 国立国語研究所, 2016 年 1 月 11 日.

- Halle, Morris and Jean-Roger Vergnaud (1987) *An essay on stress*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hayashi, Yuka (2010) Ikema (Miyako Ryukyuan). In: Michinori Shimoji and Thomas Pellard (eds.) *An introduction to Ryukyuan languages*, 167–188. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Hayashi, Yuka, Yosuke Igarashi, Yukinori Takubo, and Tomoyuki Kubo (2008) An instrumental analysis of the two tone system in Ikema Ryukyuan. In: *Proceedings of the 22nd General Meeting of the Phonetic Society of Japan*, 175–180.
- Igarashi, Yosuke (2015) Intonation. In: Haruo Kubozono (ed.) *Handbook of Japanese phonetics and phonology*, 525–568. Berlin: Mouton.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (2011) How many tonal contrasts in Ikema Ryukyuan? In: *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences*, 930–933.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (forthcoming) Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. To be published in: Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal change and neutralization* (tentative title), Berlin: Mouton.
- Ito, Junko (1990) Prosodic minimality in Japanese. In: Michael Ziolkowski, Manuela Noske and Karen Deaton (eds.) *Papers from the parasession on the syllable in phonetics and phonology* (Chicago Linguistic Society 26: Part II), 213–39. Chicago: Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
- Ito, Junko, and Armin Mester (2007) Prosodic adjunction in Japanese compounds. *MIT working papers in linguistics 55: Formal approaches to Japanese Linguistics* 4: 97–111. Cambridge, MA: Department of Linguistics and Philosophy, Massachusetts Institute of Technology.
- Kubozono, Haruo (1988) The organization of Japanese prosody. PhD dissertation, University of Edinburgh. [Published from Kurosio 1993].
- Ladd, D. Robert (1986) Intonational phrasing: The case for recursive prosodic structure. *Phonology Yearbook* 3: 311–340.
- Maekawa, Kikuo and Yosuke Igarashi (2007) Prosodic phrasing of bimoraic accented particles in spontaneous Japanese. In: *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Science*, 1217–1220.
- Nespor, Marina and Irene Vogel (1986) *Prosodic phonology*. Dordrecht: Foris Publications.
- Pellard, Thomas (2009) Ōgami — Éléments de description d’ un parler du Sud des Ryūkyū. PhD dissertation, Paris: École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archeology of the Ryukyu Island. In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 14–37. Berlin: DeGruyter Mouton.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (2004) *Optimality theory: Constraint interaction in generative grammar*. Malden, MA: Blackwell.
- Selkirk, Elisabeth O. (1984) *Phonology and syntax: The relation between sound and structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Shimoji, Michinori (2008) A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. Doctoral thesis, The Australian National University.
- Shimoji, Michinori (2009) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. *Journal of the Linguistic Society of Japan* 135: 85–122.
- Shimoji, Michinori and Yuka Hayashi (2008) Tonal alternation and rhythmic structure of Irabu Ryukyuan. Paper read at the 3rd Atami Phonology Festa. Hotel KKR Atami, 21 February 2008.
- Vance, Timothy J. (2008) *The sounds of Japanese*. New York: Cambridge University Press.
- Warner, Natasha (1997) Japanese final-accented and unaccented phrases. *Journal of Phonetics* 25: 43–60.
- Поливанов, Евгений Дмитриевич (1928) Введение в языкознание для востоковедных вузов. Ленинград: Ленинградский восточный институт.



執筆者連絡先：

[受領日 2016年3月2日

〒186-8601 東京都国立市中2丁目1番地

最終原稿受理日 2016年8月5日]

一橋大学大学院社会学研究科

e-mail: y.igarashi@r.hit-u.ac.jp

## Abstract

### **The Prosodic Structures of the Ikema and Tarama Dialects of Miyako Ryukyuan**

YOSUKE IGARASHI

*Hitotsubashi University*

Ikema and Tarama are dialects of Miyako, one of the sub-languages of Southern Ryukyuan. They both have so-called three-pattern accent system, in which three accentual classes are lexically contrastive. The three-way accentual contrast in the two dialects is neutralized in a wide range of contexts. Also, these dialects are characterized by more complex realization rules of the accentual classes than those in the Japanese dialects. This study demonstrates that the prosodic structures of the two dialects can be adequately described, only if we posit the prosodic category which poly-moraic roots and clitics are mapped onto, i.e., the Prosodic Word. This study also provides a preliminary discussion as to whether it is appropriate to consider the prosodic category at issues as the Prosodic Word on the basis of the findings from theoretical investigations into prosodic categories.